

須恵器甗に見られる朝鮮半島的要素

寺井 誠

要旨 須恵器の甗は、須恵器生産開始当初から陶邑や大庭寺などの生産地で作られる。しかし、一般的な集落では酸化焰焼成の甗が多用され、須恵器の甗が出土することはあまりない。この点を端緒にして、須恵器の甗と酸化焰焼成、つまり土師器として展開していく甗について、朝鮮半島的要素の有無で比較してみた。すると、須恵器生産地の甗においても故地が若干異なり、その後の展開でも、把手上面に切込を入れたり、把手の位置に沈線を施したりなど、朝鮮半島的な特徴が6世紀になっても残り、かつ、蒸気孔を対比すると、同時期の百済と共通するものが存在することがわかった。

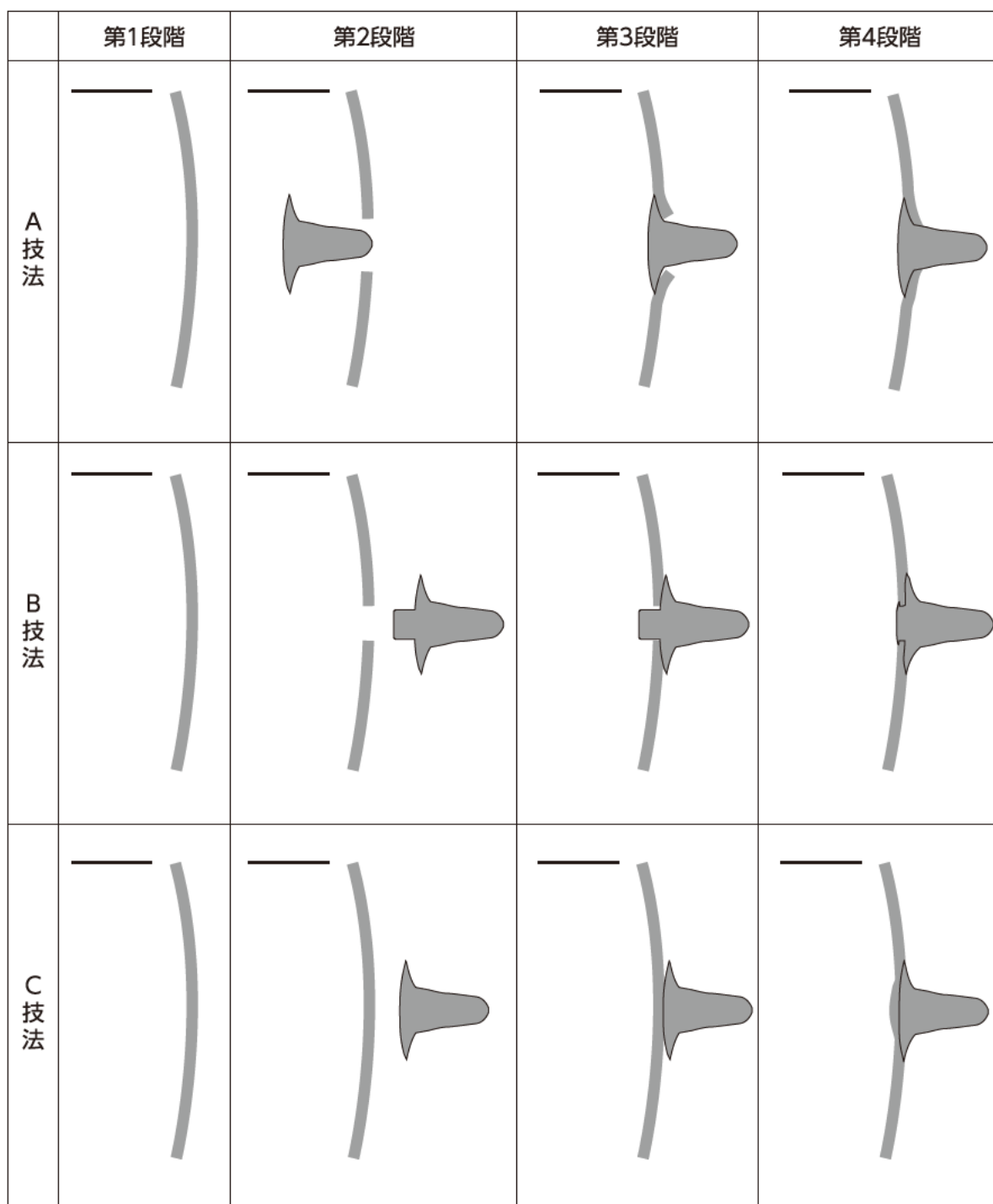
須恵器の生産地という、ある意味閉鎖的な環境で土器づくりが行われるため、土師器生産との技術交流がなく、独自に展開していったことが、土師器との差異が大きくなった要因である。また、九州など他地域でも同様の須恵器甗が6世紀代にみられることから、生産地どうしのネットワークの存在を反映しているものと考えられる。

はじめに

甗は、下から蒸気を通し、穀物などを蒸すための炊飯具である。底部に孔を1箇所あけるような簡易なものは弥生時代にあるものの、専用甗は古墳時代中期に朝鮮半島の文化的影響の下で登場する。もともと日本列島にはなかった器種であるがゆえに、朝鮮半島から伝えられたそのままの特徴をとどめている可能性があり、それを基に渡来人の故地を探る手掛かりとなる。筆者は現在、朝鮮半島の地域性を把握したうえで、日本列島出土の朝鮮半島系甗を比較検討し、故地を探る研究を進めている。

そういう研究を進めている中で、陶邑など須恵器生産地で出土する還元焰焼成（須恵器）の甗と、須恵器生産地以外で出土する酸化焰焼成の甗の形態に後述するような差異があることに気付いた。陶邑など生産地で須恵器の中に、一般的な集落で出土するような「軟質系土器」、すなわち甗などの炊飯具が出土していることについては、大庭寺遺跡の調査直後に調査担当者の岡戸哲紀氏によって、故地の特徴をそのまま留めているものと変容しているものがあることが指摘されているが（岡戸1994）、ここでは須恵器と土師器の甗の形態の差異がどういった過程で発生したのか、故地との対比をしながら、須恵器に見られる朝鮮半島的要素に着目して検討してみたいと思う。

把手の接合方法の模式図



平底甑の蒸気孔配置の模式図

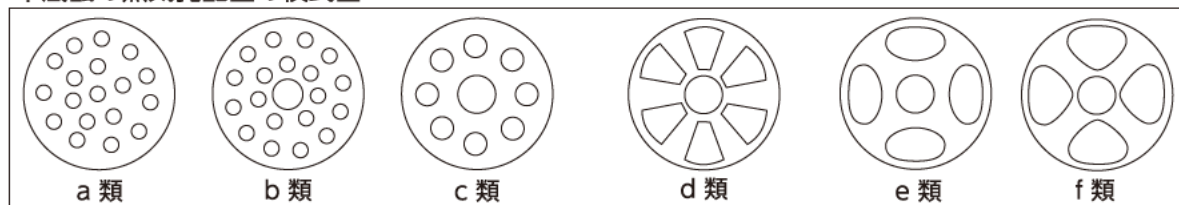


図1 把手の接合方法と蒸気孔配置の模式図

1. 甑に見える朝鮮半島の要素の整理

甑は前述のとおり、故地である朝鮮半島から伝えられた間際の頃はその故地の器形や製作技法をよくとどめていて、次第にそれが欠落していく。この点はすでに杉井健（1994）で指摘されていて、それを受けて寺井（2014）において整理したことがある。ここでは器形や製作技法に見られる朝鮮半島の要素を、本稿で議論するための前提としてまず主要なものを羅列しておきたいと思う。これらはいずれも日本列島の出現当初の甑によく見られるが、土師器化した段階では激減し、日本列島では根付かない特徴である。

①外面に格子タタキ、縄文タタキ、縦位平行タタキ、鳥足文タタキなど、もともとの日本列島にはなかったタタキで成形もしくは整形されている。

②把手が接合される位置に、目印となるような沈線もしくは凹線を施す。

③把手の上面に切込を施す。

④把手の下面に棒が刺された痕跡（刺突穴）が残る。

⑤把手が内側から挿入される（模式図は図1の「A技法」）。

なお、④については、平底の甑、すなわち故地を全羅道や忠清道などの半島南西部に求められる甑に多く見られることから、乾燥時に底部を下にして置いた際の把手の支えであると想定するが、半島南西部では丸底の鍋にも見られる場合があるため、平底とどこまで相関するのかについては正確なところはわからない。

把手の挿入方法について、図1の「把手の接合方法の模式図」に示し、仮にA～C技法と呼ぶことにする。「A技法」のような挿入方法は全羅道や忠清道に多くみられるものであるが、2014年10月に筆者が調査した慶尚北道の三国時代の甑については、内側から挿入するものがある一方で、「B技法」のような外側から突起を作り出して貼り付けている事例を複数個体で確認した。また、土師器の甑の把手接合には「C技法」のように、接合部に突起をつけずに、上からそのまま貼り付ける技法もある。B・Cについてはここでは詳述できないが、土師器・須恵器にかかわらず、日本列島における甑の成立と展開を考えるうえで着目しなければならない点であり、今後の検討課題としておきたい（註1）。

また、後述するように今回扱う甑がすべて平底であるので、平底の蒸気孔配置についても簡単に記しておく。朝鮮半島では一般的に古いものほど蒸気孔が細かく、新しくなるほど大きくなるという傾向がある。蒸気孔も形状も多様で、図1の「平底甑の蒸気孔配置の模式図」にバリエーションを簡略に示した。a類は直径1cm程度の孔が刺突によって数多く穿たれるが、よく見ると中央にひとつ、その周囲に二重に孔が巡るもの、b類は中央に2～3cm程度の円孔と周囲に二重に円孔が巡るもの、c類はそれが一重のもの、d類は台形もしくは扇形のものが6つ程度巡るもの、e類は楕円形の孔が4つ巡るもの、f類は扇形のものが4つ巡るものである。これらについては朝鮮半島では、時期差や地域差が混在して反映し、うまく型式組列できないが、概ねa類が古く、e類やf類が新しくなるという傾向はある。すべての蒸気孔がこれで説明できるわけではなく、該当しないものについては、文章で補足的に説明することとする。



図2 須恵器の甕と関連資料(1)

2. 問題意識の経緯

続いて、筆者がこのような問題意識を持つきっかけとなった資料について、自身の資料調査による見解を基に示しておこうと思う。

まず、焼成と形態のずれを初めて認識したのが、長原遺跡出土の甕である。その甕は NG02-8 次調査地の第11層出土の甕である（図2-1）。焼成は甘い還元焰焼成（いわゆる「瓦質焼成」）で、底部は平底で、蒸気孔は直径1 cm弱の円孔を、残存している範囲で見ると密に穿っている。酸化焰焼成でこのように小さな孔を数多く穿っている甕は同じ遺跡内にはなく、形態的特徴のみでいうなら福岡市の西新町遺跡にあるような3～4世紀代の古い特徴に類似する（例えば、図2-4）。このことから、還元焰と酸化焰の甕には形態の変遷過程に何らかの差異がことを予察した。ただ、これを初めて見た時点では、この差異が時期差に由来するのか、故地の違いに由来するのかなど、具体的な要因については念頭にはなかった。なお、長原遺跡で還元焰焼成の甕は他にも2-2のような多孔のものがあり、台形状の蒸気孔が巡ると推定される2-3のようなものがある。いずれも酸化焰焼成の甕にはあまり見ないものである。

こういった土師器と須恵器の甕の差異についての問題意識が芽生えてから、着目したのは陶邑及び大庭寺遺跡出土の甕であった。蒸気孔の配置に着目すると、中心にひとつと周囲に複数個の円孔を穿つc類のようなものもある一方で、直径1 cm程度の円孔が多数穿たれているa類も出土している（例えば、図2-7～9）。b類とした2-10や、d類とした2-11のような甕も出土している。この中でb～d類については、集落遺跡で出土する酸化焰焼成の甕にもあるが、a類については、現時点で筆者の知っている範囲では見当たらない。

一方、TK208型式の段階、すなわち5世紀後半になると長原遺跡など中河内の遺跡では、ハケメで仕上げられる土師器の甕が普及する。把手については図1のA技法のような接合技法は見られなくなるとともに、把手の位置には沈線がなくなり、把手上面の切込も減少する。また、底部と胴部の境は丸みを帯びてくる。

しかし、須恵器の甕ではそれが異なる。例えば、TK87号窯出土の甕（図3-1）は、外面がカキメで仕上げられるという点は通常の須恵器あり、かつ朝鮮半島にはない特徴である。ただ、器形は胴部と底部の境目が明瞭な平底で、口縁部は頸部を持たない直口縁である。把手の位置には沈線が巡り、把手は実測図では表現されていないが、観察したところ内側には土饅頭のような低い盛り上がりで接合痕の輪郭が見え、内面調整が終わった後に接合した痕跡が明瞭に見えることから、内側から挿入したA技法の可能性が高い。なお、蒸気孔は中心に円孔がひとつ、周囲に半月形に近い楕円形の蒸気孔が4つ巡るというe類に当たる。また、同じ頃の甕として堺市の立会調査地のものが該当する。3-3は把手の位置に沈線が引かれ、3-4は胴部最下位に横方向のへ



写真1 陶邑出土甕(3-4)の把手接合部分

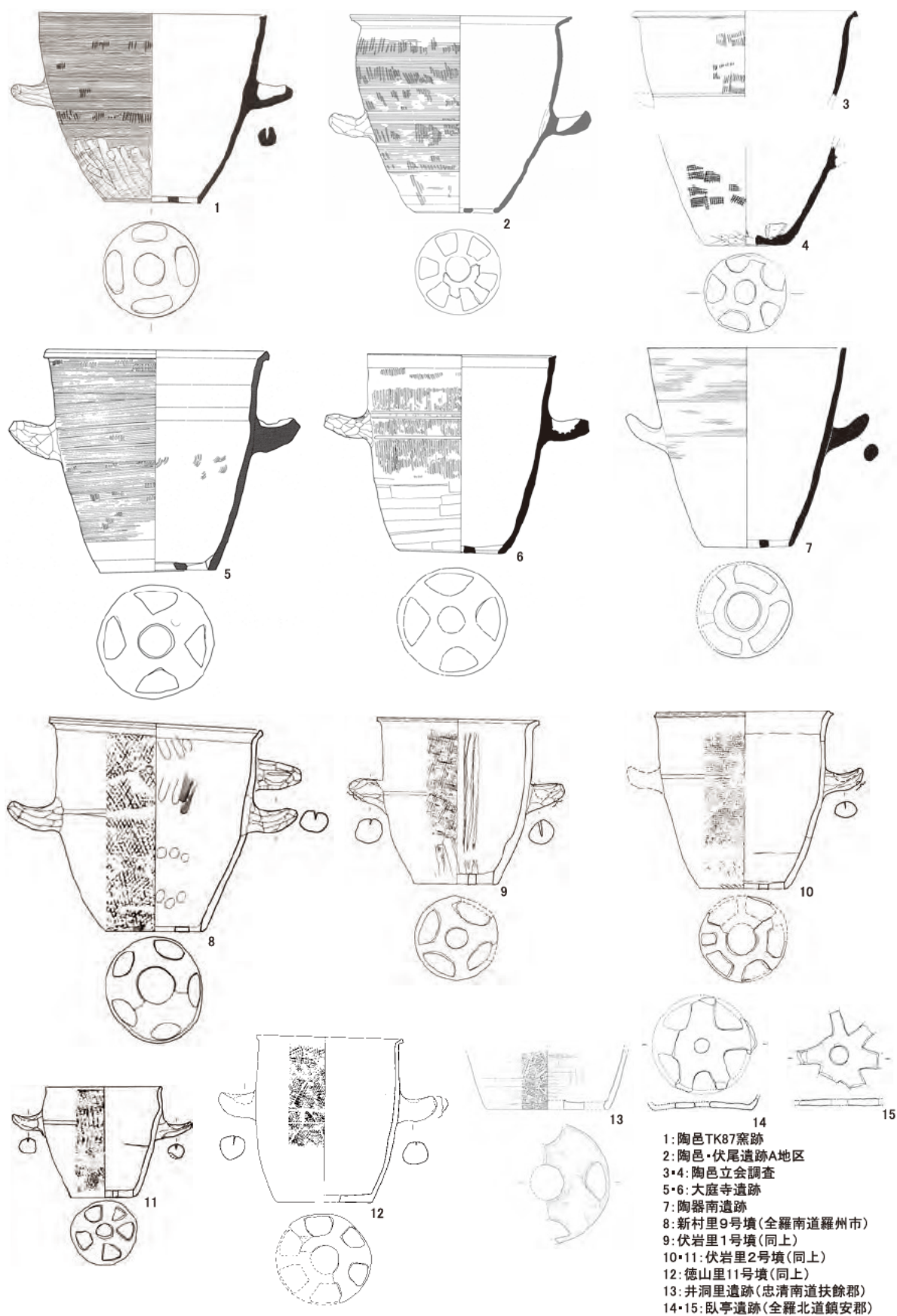


図3 須恵器の甔と関連資料 (2)

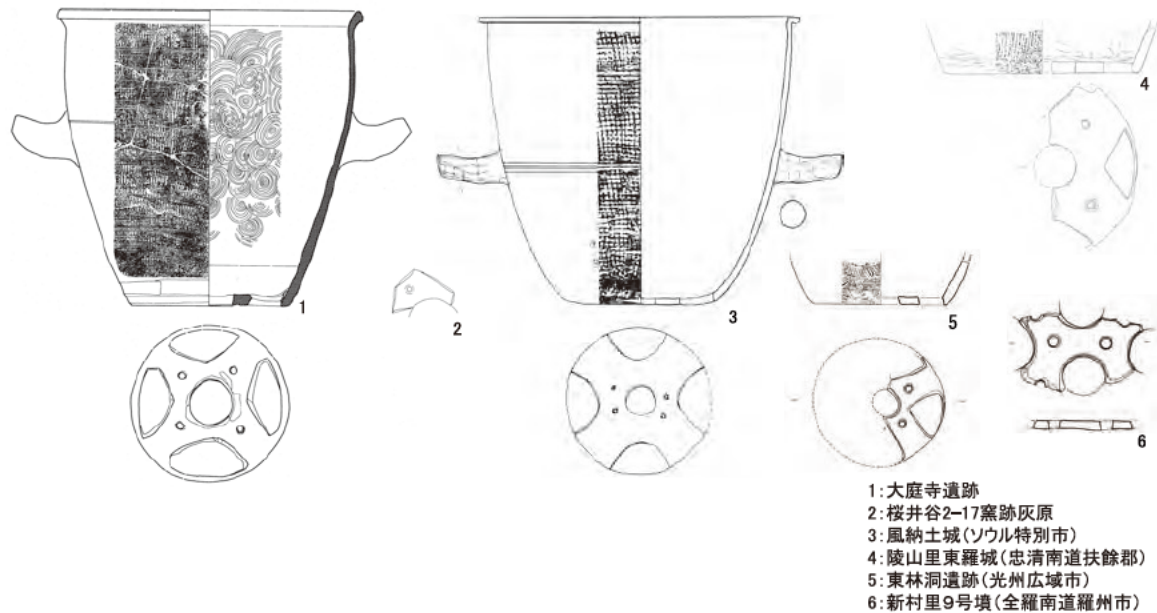


図4 須恵器の甑と関連資料（3）

ラケズリが施され、蒸気孔は半円形のものが5つ巡る。なお、3-4は把手の根本以外は欠損しているが、A技法により、器壁が外側に歪んでいるのが確認できた（写真1）。

続く6世紀代の須恵器の甑についても、土師器の甑とは異なる展開を示す。例えば、大庭寺遺跡の河川（56-OR）や陶器南遺跡で出土した6世紀代の須恵器の一群の中にある甑を見ると（図3-5～7、図4-1）、カキメや同心円文の当て具痕跡といった須恵器独特の技法が加えられている一方で、把手の位置には沈線が巡り、さらに、3-5・6には把手の上面に切込がある。底部は平底で、蒸気孔はf類のような、中心に円孔がひとつと、周囲に扇形や長方形が弧状になったような形態の孔が4つ巡っている。また、4-1のように切り残された棧橋状のところに刺突孔が穿たれるものもある。

以上のように、須恵器生産地の甑を見ると、土師器ではすでに失われたような技法が6世紀に入っても依然維持されていることが分かる。ある意味、生産地の閉鎖性（中久保2010）が、古い技法の維持につながっているのであろう。

3. 維持される朝鮮半島の要素

ここで、蒸気孔形態に着目してみたい。

まず、多孔の蒸気孔については、朝鮮半島でも3～4世紀頃の古い特徴である。2-4のような直口縁で平底多孔の西新町遺跡の甑については、全羅南道に求められる。ただ、全羅南道では5世紀になると多孔のものは非常に少なくなる。

大庭寺遺跡で出土している多孔の甑を見てみると、一見ランダムに穿たれているように映るが、同じ大きさの円孔が、中心にひとつとそれを取り巻くように二重に巡るような配置である（a類）。この点では古墳時代前期の西新町遺跡の甑2-4とは異なることがわかる。口縁部については、2-7のように直口縁のものもあるが、頸部が屈曲する2-8・9のようなものもある。一般的に頸部が屈曲するのは

5世紀以降の特徴であり、古い特徴である多孔と両立することは全羅南道では見られない。ただし、慶尚南道西部では状況が異なり、牛鳴里遺跡の頸部が折れて蒸気孔はa類という2-12の甗の事例がある。また、b類の中心に大きめの円孔とその周りに二重に小円孔が巡る2-5・10や、d類の台形の孔をめぐらす2-11については、それぞれ慶尚南道西部の2-13、2-14にそれぞれ当てることができる。この中で牛鳴里遺跡の2-12・13はこの遺跡の11号住居址で出土し、6世紀初め頃と思われる大加耶系の土器と共伴していることから、この頃までa類やb類のような蒸気孔配置が残るのかもしれない。また、坪村里遺跡の2-14については、この地域では慶尚南道東部と異なり、平底が普通であることから、隣接する百済・馬韓の影響の下で在地化したものと考えている（徐賢珠2014）。

続いて、5世紀後半から6世紀にかけての3-1・2・4～6のような、中心に円孔、周囲に楕円形などの孔を配置するものについては、全羅南道に類例が認められる。特に3-13～15については、百済の6世紀中頃以降の泗沘期に該当するものであり、6世紀になっても倭と百済で甗の共通性が維持されていることが想定される。また、4-1のような切り残された棧橋状のところに刺突孔があるものについても、風納土城出土の5世紀後半頃の4-3のような事例があるとともに、泗沘期に該当する、6世紀中頃の以降の4-4のような例もあり、かつ全羅南道でも類例がある。管見による限りは、豊中市の桜井谷2-17号窯の4-2がそれに該当すると思われる。

以上のような流れでみると、初期須恵器の段階は慶尚南道西部の加耶西部、5世紀後半以降は全羅道や忠清南道の百済・馬韓との関係があるように認められる。酒井清治氏が、陶邑の系譜について、TG232段階の頃は加耶に、TK73やTK216型式の頃になると百済・栄山江に系譜が求められるものが増加すると指摘したが（酒井2001・2004）、大枠ではそれと合致する。ただし、TG232段階の頃の甗に、いわゆる金官国の領域である慶尚南道東部にあるような、丸底の甗は皆無である。また、朝鮮半島とのつながりは、初期須恵器の段階だけではなく、細々とではあるが、6世紀代になっても継続している可能性が見えたのは興味深い。

4. まとめと展望

以上のように須恵器の甗は、一般の集落域で出土する甗とは異なる形で展開する。出現期の故地が慶尚南道西部に求められるものがあるという点は、生産地以外の集落と異なる。須恵器生産が安定的に行われる5世紀後半以降は把手の上面に切込をいれたり、把手の位置に沈線を巡らせたりなど、古い特徴を維持する。中には6世紀になっても当初の甗の製作技法の一部が維持されているとともに、朝鮮半島の甗と併行して変化していることから、継続的に朝鮮半島とのつながりがあったことがうかがえる。須恵器生産は、窯業生産という当時のテクノロジーが結集する場であるため、国内だけでなく、常に朝鮮半島から情報を入手しようとしていたことが背景にあるのではと考える。

なお、陶邑以外でも6世紀以降の須恵器甗で、本稿で指摘したような特徴を有する甗が見られる。北部九州でも、牛頸窯跡群の近隣の惣利西遺跡で把手上面に切込が施された須恵器甗が出土している（亀田2008）。近隣の遺跡で出土する土師器の甗とは共通性はないものの、須恵器の甗どうしても遠隔地でも共通性がうかがえそうである。亀田氏が指摘するように渡来人との交流の結果である可能性

がある一方で、陶邑など生産地どうしのネットワークがあったことを反映しているものと思われる。

なお、地域を広く見て比較検討していくと、須恵器生産における朝鮮半島とのつながりや日本列島内での横のつながりが見えてくることが期待できる。今後の課題としておきたい。

註

- (1) 脱稿直前に市来真澄・森本徹(2009)で把手の接合方法の検討されていることを知ったので、その内容を簡単に紹介しておく。ここで「平面型」という接合技法の中で、接合部が広がる「末広型」と呼んでいるものが、本稿での「A技法」に該当するのかもしれないが、挿入方向については記されていない。また、「突出型」と呼んでいるものが本稿の「B技法」、「貼付型」と呼んでいるものが「C技法」に相当する。

謝辞

本稿をなすに当たり、大阪府文化財センター岡戸哲紀氏、市本芳三氏、鹿野墨氏、堺市教育委員会の池峯龍彦氏に資料調査などでお世話になった。また、写真1の掲載に関しては、堺市教育委員会より許可をいただいた。記して御礼申し上げる。

本研究は科学研究費(基盤研究C)25370902 研究代表者 寺井誠)の助成を受けた。

参考文献

- 市来真澄・森本徹2009「土師器把手の分析」『讃良郡条里遺跡』IX 大阪府文化財センター、399-402。
 岡戸哲紀1994「陶邑の韓式系土器-軟質系土器の資料紹介-」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2、29-40。
 亀田修一2008「牛頸窯跡群と渡来人」『九州と東アジアの考古学-九州大学考古学研究室50周年記念論文集-』、379-409。
 酒井清治2001「倭における須恵器生産の開始とその背景」『駒澤大学文学部研究紀要』第60号、35-52。
 酒井清治2004「須恵器生産の始まり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集、339-365。
 杉井健1994「甕形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号 大阪大学文学部、31-56。
 寺井誠2014「甕の観察点-長原遺跡で出土した古墳時代中期の資料の検討を基に-」『大阪歴史博物館研究紀要』第12号、17-29。
 寺井誠2015「甕から見た渡来人の故地」『一般社団法人日本考古学協会第81回総会研究発表要旨』、48-49。
 中久辰夫2010「陶邑における韓式系軟質土器の変容過程」『韓式系土器研究』Ⅱ 韓式系土器研究会、1-23。
 徐賢珠2014「嶺南地域에 나타난 京畿・湖西地域 馬韓・百濟系土器와 그 意味(嶺南地域に現れた京畿・湖西地域の馬韓・百濟系土器とその意味)」『湖西考古学』30 湖西考古学会、28-61。

図・写真の出典

写真1：2015年4月の調査にて寺井撮影(堺市文化財課所蔵資料 掲載許可済)

図1：寺井作成

図2-1・3：大阪市文化財協会2005『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』、2：大阪市文化財協会2002『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』、4・5：大阪府教育委員会1978『陶邑Ⅲ』、6・9：大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1990『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』、7・8・10：大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1993『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』、11・12：東西文物研究院2009『咸陽牛鳴里遺跡』、13：慶南発展研究院歴史文化センター2007『山清坪村里遺跡Ⅱ』

図3-1：大阪府教育委員会1978『陶邑Ⅲ』、2：大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1990『陶邑・伏尾遺跡

A地区』、3・4：堺市教育委員会1998「陶邑古窯跡群地区」『平成8年度 市内遺跡立会調査概要報告』、5・6：大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1996『陶邑・大庭寺遺跡V』、7：大阪府教育委員会1999『陶器南遺跡発掘調査概要・V』、8：国立文化財研究所2001『羅州新村里9号墳』、9～11：全南大学校博物館1999『伏岩里古墳群』、12：全南大学校博物館2002『羅州徳山里古墳群』、13：忠清文化財研究院2008『扶餘井洞里 오얏골·평바위골 遺跡 (扶餘井洞里 오야컬·쿠온파워골 遺跡)』、14・15：群山大学校博物館2001「臥亭遺跡 1次調査内容」『鎮安龍潭ダム水没地区内文化遺跡発掘調査報告書Ⅰ 臥亭遺跡』

図4-1：大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1996『陶邑・大庭寺遺跡V』、2：少路窯跡遺跡調査団1982『桜井谷窯跡群2-17窯跡』、3：韓神大学校博物館2009『風納土城X』、4：忠清文化財研究院2006『扶餘陵山里東羅城内・外部百濟遺跡』、5：湖南文化財研究院2007『光州東林洞遺跡Ⅲ-溝-』、6：国立文化財研究所2001『羅州新村里9号墳』

스에키 시루에 보이는 한반도 요소

테라이 마코토

스에키 시루는 스에키 생산 개시 초기부터 陶邑과 大庭寺 등의 생산지로 만들어 졌다. 그러나 일반적인 취락유적에서는 산화연 소성의 시루가 많이 사용되고, 스에키 시루가 나오는 것은 별로 없다. 이 점을 단서로 스에키 사루와 산화연 소성, 즉 하지키으로 전개되는 시루에 대해서 한반도 요소의 유무로 비교하였다. 그러자 스에키 생산지의 시루에도 고지가 약간 다르고, 이후의 전개에서도 파수 상면에 홈을 내고, 파수의 위치에 沈線을 돌리는 등 한반도의 특징이 6세기가 되어 도 남아 있고, 증기 구멍을 비교하면, 같은 시기의 백제와 공통점이 존재하는 것으로 확인되었다.

스에키 생산지라는 폐쇄적인 환경에서 토기가 만들어지기 때문에 하지키 생산과 기술 교류가 없이 독자적으로 전개된 것이 하지키와의 차이가 커진 요인이다. 또한 큐슈(九州)등 다른 지역에서도 같은 스에키 시루가 6세기에 보이기 때문에, 생산지끼리의 네트워크가 존재한 것을 반영한 것으로 생각된다.